

佐藤愛子

田力はたへん



佐藤愛子

田力本太人

男はたいへん

一九八二年九月二五日 第一刷発行

定 価 八八〇円

著 者 佐藤愛子

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

郵便番号 一〇〇一

電話 出版部 (〇〇三) 二三八一 二八四二

販売部 (〇〇三) 二三八一 二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

目次

夫婦って何	……	5
満たされぬ夢	……	31
不満の中身	……	69
男の正体	……	107
女の正体	……	145
一寸刻み五分だめし	……	184
男はたいへん	……	208

装帧
滩本唯人

男はたいへん

夫婦って何

1

「愛子先生、明けましておめでとうございます。

夫六十三歳、私五十三歳、三十三年夫婦として暮して来てまた新年を迎え、つくづく思います。ああ、夫婦”っていったい、何なのだろう！」と。

私たち夫婦の間では、ものごと一切の拒否は許されません。理由は簡単。
『嫁^かしては夫に従う』

これです。老いても尚、ずーっと夫に従わせられるのです。夫はそう思いこんでいて、その思いこみは、いささかもゆるぎません。1足す1は2であるごとく、地球は丸く、リングは上から下に落ちるごとく、この鉄則は我が家にあつては普遍なのです。

夫の頭の中に、東大出身を誇るカタマリがあります。私は東京大学という活字を見ただけでゾツとする。(東大東大とえばりちらして、フン、なに教えてハルのやろ！ 万事、ここが諸悪の

根源なんだ！)

東京大学出身のエリートである夫は、夫の意志に反することをする妻は、『悪妻』であると決めつけます。私は犬が嫌いです。しかしエリートの自負に輝く夫は、私が犬を可愛がらないということだけで『悪妻』だと決めつけるのです。

『犬を愛さないやつの心はヒビ割れてる』

なんていうのです。犬は愛するけれど、妻を愛さないやつの心はどうなってるの！ といつてやりたいけれど、そんなことでもいおうものなら大変ですから、じっと黙ってガマン一筋。雨の日も雪の日もスコッチテリアを散歩させられているのです。

そんなに犬を愛するのなら、愛してる人間が散歩させたらいいではありませんか。

愛してる人間がフンの始末をすればいいではありませんか。

そうもいいたいけれど、いわずにじーっとガマンの子。

ニコニコ顔で命令に服従して、胸の中は涙ポロポロ。押えても押えても、胃の奥から、嘔吐感おうとかんがこみ上げて来ます。六十三歳にもなって、うちのエリートは、尚、オゾマシイ行為が大好きなのです。ガクガク入歯鳴らして、フニャフニャのチョロロ一滴。私は最初から最後まで一心不乱に心にお題目を唱え、

『南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、ハヨオワレー、ハヨオワレー』

やっと終ってごろりと向う向いて、ウワバミのイビキ。

地獄とはこのことか——何と大ゲサな、とお思いかもしれませんが、本当にそう思うんです。

愛子先生、

夫婦っていったい何でしょう。

今日も隣の奥さんが来て、いわれました。

『今、自殺したり、家出したりしたらソンでしょ。後しばらくで、ちよびつとの財産でももらえ
るでしょう』と。

隣の奥さんはまた、こうもいわれました。

『主人が死んだら、主人の身につけてたもの。メガネや箸をこの庭の真中で燃やしてやる――
その日がいづくるか、その火を見るのが今の楽しみ』

また、こういうこわいこともいわれました。

『ヌカミソの中に顔写真漬けておくと、色が変わってオモシロイですわ』

これが外から見たら、一点非のうちどころのない、神戸M女子大学学長夫人の蔭の声なのです。
ああ、夫婦生活って、長いです。辛いです。やっと息も絶えだえに三十三年経ったのに、あと
何年つづくのでしょうか。体力気力共に衰えた後半は、もう“永遠の暗闇”という気がします。ほ
ととと疲れ果てました。

愛子先生が『私の中の男たち』にお書きになったように、男は可愛いのにじらしいのと思える
日は来そうもありません。もう死にたいです。』

ある朝、うらかな陽の射す初春の縁側で、私はこんな手紙を読んだ。一面識もない人からの
手紙である。名前はなし。住所もない。ただ「一読者より」とあるだけだ。

年は「五十三歳」。わかっていることはそれだけである。封筒の消印は「神戸」となっている。日附は辛うじて、一月二日と読める。

正月の二日にこういう手紙を投函する五十三歳の女性はどんな顔の女性だろう？

化粧はしているか、していないか。

和服か、洋服か。洋服ならスカートか、スラックスか、部屋着ふうロングドレスか。靴下は毛糸の手編みか、パンストか。

背は高いか、ズングリか。

色は黒いか、キメは細かいか。

太肉か、痩せ型か。

細眼か、丸眼か、吊り眼か、垂れ眼か。

.....

際限なく想像を廻らせる。その結果、私が作り上げたイメージは、どこことなく強情そうだが明るい大きな眼、顔の輪郭はやや角ばった丸顔で（つまりキンツバ型）、色は黒くはないがキメが粗くザラザラした感じ、化粧をすると肌に馴染まず粉っぽくなるタチで、骨格はガッチリした肉中背、「息も絶えだえ」とか「もう死にたいです」といいながら、ご亭主より二十年も長く生きるのではないかと思われる丈夫そうな感じ……そんな風貌である。

その人が、うらうらと陽が射すめでたい正月にこのような手紙を書いた、その心境を更に私は想像する。

新しい年が明けて、近隣もテレビもめでたずくめで華やいでいる。しかし彼女には何の華やきもなく、楽しいこともなく、さりとて心配ごと苦勞もなく、忙しくもなく、することもないままに、ぼんやり明るく晴れ渡った元日の空を眺めているうちに、急に五十三歳という己れの年が気がつき、それと同時にただひたすらガマンの人として、関白亭主に従って来た過去の歲月の、空しく消え去ったことに気がついて、突然、カッときたのであろうか。

それとも東京大学出身のエリート亭主が、元日早々、「おぞましい」行為でも強いたのであろうか。

私はそのエリート関白の風貌を想像してみた。中肉中背の彼女より、四センチくらい背が高く、がっしりした身体つき、頸は太く強く、脚はややO型彎曲。若い時は顔の造作は良い方で、それに東大エリート意識が加わって、見映えのする紳士だった。おそらくは稼ぎもよかった。

もしかしたら彼女が関白に屈伏していたのは、その「見映え」と「稼ぎ」に対して一目置いていたためかもしれない。

しかし寄る年波と共に、その「見映え」も「稼ぎ」も次第に衰えて、今は東大エリート意識と関白意識だけが目立つじいさんになって来た。入歯を鳴らして「おぞましい行為」に耽るジジイになった……。

そこで猛然と沸き起って来たのが、憤り、嫌悪感、口惜しさ、イジワル。そうして暇に任せて、「夫婦っていったい何でしょう」

と改めて問いたい心境になって来た……。

手紙を膝に置いて、私はそんな想像に耽ったのであった。

話を変えるが、かつて私は、

「佐藤さん、あなたは一体、男の味方なのか、女の味方なのか」と詰め寄られたことがある。

詰め寄ったのは女性解放運動に挺身する三十八歳の独身女性で、「職場に於ける男女差別撤廃」を十五年間、叫びつづけて来た人である。私が彼女と知り合ったのは、「女子社員お茶くみ問題」で頭から湯気を立てていた頃だ。

彼女は化粧のない赧ら顔の、生命保険会社庶務課勤務の女の子だった。

「女にばかりお茶くみをさせて、男はそれを飲むだけ。お茶が飲みたければ、男が自分でいれればいいじゃないですかッ！」

と彼女はガラガラ声で叫んでいた。ある女性誌が企画した「現代女性はいかに生きるべきか」の座談会で私たちは会ったのだ。

「まあ、それはそうだけど、でも、お茶をいれてやって、相手が喜ぶのなら、いれてやればいいじゃないですか？ なにもそう、お茶ぐらいのことでカンカンにならなくても……それが女の大ききさというんじゃないですか」

私がそういった時である。みるみる彼女の赧ら顔は赤銅色に変じて、佐藤さん、あなたは一体……という騒ぎになったのだ。

「いやべつに、私は男の味方をしているわけじゃないんですけど……」

「いいもあえず、私は彼女に言葉を奪われた。」

「あのね、佐藤さん、あのですね、たかがお茶一杯のことという——そういう考えが、私は男を増長させるもどかと思うんですよ。たかがお茶ぐらい……と思って一步譲る。その一步が次の一步を呼び、また次の一步を呼び、結果的には百歩譲ることになるんです。男社会の中で、のうのう、ぬくぬく、女を蔑視するのを当然のこととして来たこの頑迷な巨象を斃すには、蟻のようになかケラ—なかケラ、小さいことから切り崩して行かなければならないんです！ たかがお茶」という発想——それこそ女が女自身の頸を締める、女の解放を阻む諸悪の根源ですッ」

「はあ、なるほど、わかりました、ごめんなさい」

「といって私は敗退したのだが、彼女は数日後、手紙で、更に追討ちをかけてきた。」

「先日は失礼しました。」

あの時、いい残したことがありますので一言、申し添えます。あの時、佐藤さんは、

『はあ、なるほど、わかりました、ごめんなさい』

「といって、私との論争に終止符を打たれました。そのやり方がですね、それが実に『男^{オトコ}的』であると思ふのです。男は、正論に追われると、『わかった、わかった、君のいい分にも一理ある。確かに正論だよ』とあっさり認め、敗退したふりをしてその場逃れをします。私は私の父、兄、会社の上司、同僚などによって、それを体験実感しています。」

それは口先だけのフリであって、心から敗北を認めたわけではないことは、その後の彼らの言

動によって実証されているのです。

そのオトコのやり口をあなたはそっくり踏襲されているように私は思います。

はつきりいって、佐藤さんは前進しようとする女の足を引っばる男側のまわし者です。異論はあるでしょうが私はそう思います。男社会の中で女の自由、勝利をかちとるために苦闘している私は、あなたのような人が女の中にいることをたいへん残念に思うのです。」

今度は手紙であつて座談会ではないから返事をする必要はなかった。それで私はどうやら進歩的女性の間では「女の敵」「男の廻しもの」という烙印を押されてしまった様子である。

しかしその私も進歩的女性軍に非ざる女性、平凡な家庭婦人の間では、頼もしい「女の味方」「男をやつつける総大将」のように信頼されているのである。その証拠が神戸のエリート関白の夫人の手紙である。

男の敵なのか、女の敵なのか自分でもよくわからぬままに私は一九八〇年の十一月、五十七歳の誕生日を迎えた。夫と名づくものとは縁がなくなつて十年、恋だの愛だのヤキモチだの、という心境ともほど遠くなつた。夫がいらないから舅もしゅうとめ姑とも縁がない。娘は一人いるが、これまた男か女か判定しにくいようなシロモノであるから、娘の恋愛に頭を悩ませる、というようなことも縁がない。娘の婿や嫁ぎ先の親とケンカするということ楽しみ(?)もまだない。

所在なく縁側の古藤椅子に腰をかけて、福寿草の鉢植えを眺めながら、来し方の夫婦喧嘩の華々しさを懐かしく偲びつつあの家庭この家庭、あの男、この女、いろいろ眺めてはよその惑星の戦争を見物しているような面白半分の趣、また悪くないのである。

ところで一月の末、私は古い友人から結婚式の招待を受けた。笠井松子という私の女学校時代のクラスメイトの末娘、美加子さんが東京の銀行員と結婚することになったのだ。

笠井松子は灘の有名酒かき鶴の醸造元へ嫁ぎ二男三女を産んだ。二男二女はそれぞれみな結婚して独立し、

「いよいよ今度で親の責任も終わります。後は夫と二人、いったいどんな生活になって行くことや、寂しいのか、嬉しいのか、よくわからぬ心境です。」

と招待状の余白に走り書きがしてあった。その結婚披露宴に私は出かけて行ったのである。

結婚披露宴は極めて常識的、型通りの、めでたいのかめでたくないのかわからなくなるくらい退屈なものであった。結婚式は厳粛なものであるから、面白さを求めるなんて不謹慎な、と叱られそうだが、私観ではどうも金持になればなるほど結婚披露宴はつまらなくなるようである。それは結婚する当事者のことが忘れられ、親の経歴格式地位財産の披露宴のような具合になってしまうためであろうと思われるが、この結婚パーティもそういう型の典型的ともいえるべきものであった。

と、その時、退屈しきっている私の耳に、目覚し時計のチャイムのごとく転がり込んで来た言葉がある。

「えー、では次に、新婦美加子さんがご卒業されました神戸むつみ女子大学学長坂ノ上健吉郎先生からご祝辞を頂戴したいと思えます」

——神戸むつみ女子大学学長……むつみ女子大学……M女子大学……？

あの手紙にあった奥さんにヌカミソの中に顔写真を漬けられている人とはこの人ではないのか？——。死んだら、メガネ、箸、身につけていたもの一切、庭の真中で燃やして、その火を眺めるのを楽しみにされてる人——。

私は首を伸ばしてその方を見た。

私は末席だが、学長先生はメインテーブルに就いておられる。おもむろに立ち上り、一礼して咳払い。

「えー、私はただ今、ご紹介に預りました神戸むつみ女子大学学長坂ノ上健吉郎でございます……」

実にしびい響のいい声である。眩^{まは}ゆいばかりの銀髪をオールバックにし、六尺近い堂々たる恰^{かた}幅。眉秀で、鼻高く、眼光炯々^{けいけん}として悠然と満座を見渡す。若い時はさぞかし、と思える偉丈夫である。

「ご立派なお方でいらっしゃいますわねえ」

と隣席の中年婦人が囁いた。花嫁美加子さんの従姉妹で、ピアノの教師をしていると、さっき、私に自己紹介した人である。

「そうですねえ」

と私も相槌を打ちつつ、学長先生を観察する。

「いささか手前味噌の観があるかもしれませんが、私どもの学校では、何よりも品性ということ